

## 星が教えてくれたこと

タケゴリカ 石川県

ちょうど一年ほど前から、私と8歳の長男は地元の自治体が主催する天体観望会に参加している。観望会のスタッフさんには毎回大変お世話になり、月に何度か訪れる、星空を眺める時間は私にとっていろんな意味で大切な時間になっている。そして、長男も自分が本で得た知識をものしりな大人にぶつけることができる機会として、とても楽しみにしている。

会に参加するきっかけは、長男の性癖とも呼べる勉強好きからだった。保育園の年長組だった2年前にバス遠足で連れて行ってもらった児童館のプラネタリウムが彼の知識欲を刺激し、はまってしまったのだ。次々と湧いてくる疑問の数々がある中で、私の乏しい知識では彼の知識欲を満たすことができなかつたのだ。

それ以前から、彼の性癖には気づいていた。三歳になる前に、教えてもないのにひらがなを読んでいる息子の姿に私は驚かされていた。どうやって彼がひらがなを覚えたのか、未だに謎のままであるが、それを皮切りに道路標識、カタカナ、国名と首都、国旗…。絵本や大人の本を片っ端から読む彼の知識はどんどん広がっていった。

その反面、彼はコミュニケーション能力が弱いように見えた。いわゆる「空気が読めない」タイプの子どもであった。また、食べ物の好き嫌いが異常に激しく、ある時期は白いご飯以外の食べ物は一切口にしないということもあり、食事のたびに私と長男が繰り広げる光景は主人いわく『戦争』だったらしい。

大学のとき教育学部に在籍し、発達心理学の基礎をかじっていた私は、ある時点から長男を『自閉症』ではないか、と疑い始めていた。しかし、かわいいわが子なので打ち消したい気持ちも同時に働いていた。

長男が6歳を迎えたある日、私の父から

「今日、自閉症の子を持つ知り合いから話を聞く機会があったのだが、ぴったりあてはまるのではないか。」

ということを言われた。

「病院に行ったほうがいいのではないか」

とも。そのころの長男は、私の思いが通じたかのように食べ物の好き嫌いをどんどん克服し、二人の弟の存在も大きかったと思うが、空気が読めないなりに子どもの集団に混ざり『ヒーローごっこ』などもするようになっていた。それを見ながら、

「そんなに人と違うじゃない。」

と思い始めた頃だった。だけど、自信が持てないでいた私は、父の言葉に正直傷ついた。

その頃から、私は長男に『普通』であることを押し付けることに躍起になっていったのだ。周囲から浮いてしまわないように、『変な子』というレッテルを貼られてしまわないように、人の倍くらい厳しく彼をしかっていたのではないだろうか。

その間にも、実家の父母から何度も

「病院へ連れて行け」

と言われたが私はそれを退け続けた。自分の中にある両親と同じ思いが消えていないのも分かっていたのだが、はっきりと宣告を受けることが怖かったのだ。

長男は相変わらず自分の知識を増やすことに一所懸命で、本屋に立ち寄れば星座図鑑や、宇宙の秘密図鑑のコーナーにピッタリと張りつくのだった。あまり観測場所としては良好ではない我が家の庭に出ては、空を見上げ

「あそこにあるのが白鳥座、こと座、わし座」

などと、弟たちや私に教えてくれたりもした。彼の目には図鑑に載っている点と線がはっきりと夜空の中に見えるのだ。そのときの私にとっては星の点々は単なる光る点でしかなく、線で結ばれることもなく、星座として見えることはなかったのだが。

そうして迎えた保育園の卒園式。卒園する子どもらはひとりひとり『夢』を発表し始めた。女の子ではお花屋さん、お菓子屋さん、保育園の先生、男の子ではオリンピック選手、サッカー選

手、などが人気のようにだった。その中で長男は、

「僕は夜空の星座が好きなので、大きくなったら天文学者になって、毎日星の観察をしたいです。」

と堂々と発表したのだった。会場からは一瞬ざわめきが起こったような気がする。隣に座っていた、友達のお母さんから、

「ステキな夢ですね。彼らしいわ。」

と言ってもらえた時、今まで溜め込んでいた気持ちがスーッと軽くなり、そして涙が次から次へとあふれだした。私が知らないうちに、私が気づかないうちに、彼は夢を持つほど成長していたのだと、当たり前この事実がとても嬉しかったのだ。そして、大切なのは『普通』でいることではなく彼らしくいることだと思えた瞬間だったように思う。

それからの私は努めて彼から星の話聞くようになった。会うたびに増えていく知識を目の当たりにして、私の両親も思うところがあったのだろう、彼の7歳の誕生日に、小さな天体望遠鏡を買ってくれた。正しい使い方を示してやれない母（私）のせいで、1年間は宝の持ち腐れになっていたが、先日取扱説明書が彼の机の上に広げられていたのを見ると、そろそろ自ら使い方をマスターしようと勉強を始めたらしい。また、自治体の天体観望会の存在を私たちに教えてくれたのも、実家の両親だった。

より深く広い知識を持つ人との天体観望会は彼の知識欲を大いに満たしてくれている。大きな天体望遠鏡を使っただけの星空観察は、彼の夢への第一歩であり、他の人々とのコミュニケーションを練習する大切な場所となっている。母である私は、彼と趣味の時間を共有することが嬉しく、最近ではカメラで月や星座を撮影する楽しさにもはまりつつあり、彼のおかげで楽しみが増えた。

相変わらず実家の両親は、長男を病院に連れて行ったほうがいいのではないか、と言うことがある。私自身も母として、目立つことなく『普通』であることを望んでしまう日もあるのは事実だ。しかし、一緒に星を眺め、語り合う時間を持つことでその気持ちはいつでも消し去ることができるようになった。子どもの個性というのは、それぞれが星のように光り輝く点なのかもしれない。大きな星、小さな星、赤い星、白い星、色々あるけれど、その光の点をつなげてつなげて、星座のように形にすることが、夢をかなえるということなのかもしれない。星の世界は無限

だ。宇宙全体であれば、私たちが知らない名もない星のほうが圧倒的に多いのだろう。きっと子どもの心も同じ。だからこそ、子どもたちを目に見えるものだけで判断してしまわないように、彼らが作ろうとしているいくつかの星座を見守り、いつくしんでいこうと今は思っている。これこそが、長男と一緒に星空を見上げて私が学んだことだから。